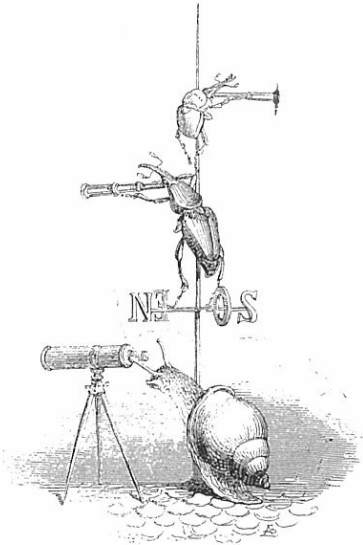


# フィールド 便り



リレー連載

忘れられた当たり前を探す！

目からウロコのフィールドワーク⑥

## 呑んで、唄って、牛糞撒いて、田植えして

### 有田ゆり子

ありた ゆりこ

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程

(専攻は森林社会・政策学、植物生態学、ラオス・タイ・カンボジア地域研究)

東北タイの主食はもち米である。少しのおかずで大量の米を食べる。もち米を作ることは一年分の食物を確保すること、滞りなく田植えを行うことは農家の最優先事項である。

多くの農家が政府推奨の、高値で売れる一品種のみを植えている。日本では例えばコシヒカリのようなものだ。しかし敢えて消滅しつつある在来品種を植えているという、チャンデイ父さん

の噂を聞いた。そこで話を聞きに、父さんの家を泊まりがけで訪ねるようになった。

繁忙期なのだから話を聞くより、まず手伝い。二〇年ほど前までは田起しと代掻きに水牛を使っていたが、現在は耕運機を使う。しかし、田植えは全て手作業。妻のペーン母さんを手伝い、苗代から苗を抜いて田に運び、腰をかがめて二人並んで列状に、後ずさりしながら植えた。

田植えをしている脇で、父さんが牛舎から集めてきた牛糞を盛大に撒く。父さんはその地域でも珍しく、有機農業を行う篤農家で、化学肥料は使わないと知っていた。しかし、牛糞の洗礼には面食らった。息を止めて水面に浮いた牛糞の中に手を突っ込んでの田植え。「もつと前に撒いてくれたらいいのにとちらつと見ると、気持ちを見透かすように父さんがニヤニヤしながら「我々はウンコを食べているんだよ」



父さんと母さんと一緒に苗抜き作業(タイ、コンケン県)。

「稲は牛糞を食べる、人間は米を食べる、即ち人間はウンコを食べるってわけだ!」。教科書で習った物質循環よりも、ずつと説得力がある。

以前は多くの農家が手伝い合って田植えを行っていたが、近年はもっぱら

人を雇う。しかし父さんは出費を抑えるために人を雇わない。四人の子どもは出稼ぎに行つて帰つてこないのので、たった二人でもくもくと働く。労働力を分散するために早稲わせ、中生なかに、晩稲おくこと、田植えの適期が異なる品種を植える。これも多品種を植える理由のひとつである。

昼休み、父さんは自家製のどぶろくを飲む。でも少しも酔わない。いや、酔うけれどばりばり働く。しかも歌い出す。「これはわしのハートを表す歌なんだ」。「良い田んぼって言ったって、良い女房とは比べられないさ、良い女房って言ったって、良い夫と同じじゃないさ、良い種もみを使えよ、悪い品種だと大事な田んぼが台無しだ」。勧められて飲んでしまい、もうろうとしてきた頭で「母さんと種もみを同じくらい愛しているんだな」と納得した。母さんは対照的に物静かで優しい人だ。あやしい手つきでのろのろと苗を

植えていると、自分の列はなかなか終わらない。何も言わずにさり気なく、幅寄せして植え足したり、後ろの方から加勢してくれる。「子共の学費のためにあひるを飼つて、卵を売つてたの。でも苦労して、大学まで行かせた娘は町へ働きに行つたきり、一度も帰つてこないの」。普段は方言を話すので、タイ語はややぎこちないが、易しい言葉を選んでゆっくり話してくれる。二人

とも実の娘のように可愛がつてくれた。労働の後、夕食はもち米と香辛料が効いたスープ、どぶろく。全て農園で採れたものだ。特に酒は人を親密にする。饒舌になつた父さんは農業への思いを語つた。早口の方言は聞き取りにくい。酒に強かつたら父さんの熱い思いがもつとわかつたのに。しかし言葉や酒に強くななくても、共に過ごした思い出は灯りのように暖かく心の中にもり続けている。そろそろ父さんと母さんに会いに、タイに行きたくなつた。